第十二回名田庄多聞の会
ネットワーク上の匿名とプライバシーの問題

早川　みなさんこんばんは。時間になりましたので、名田庄多聞の会をただいまより開催いたします。本日は、京都女子大学現代社会学部准教授の江口聡先生に来ていただきました。演題は、「ネットワーク上の匿名とプライバシーの問題」です。最近は、インターネットや携帯電話などで恐ろしいことが起こっていますので、そういう話になるのでないかと思っています。講師の先生に来ていただいたいきさつについて簡単に説明します。ここは、専門的知識を持つ者と持たない者、あるいは利害や立場の異なる人々、そのような間をつないでコミュニケーションを可能にするにはどうしたらよいか、というようなことを研究テーマにしているところで、講師を市民の研究会に派遣することも行っています。それで、インターネット経由で阪大のこの研究組織に、インターネットや携帯電話の危険性等について誰か適当な講師を派遣していただけないでしょうかと問い合わせたところ、江口先生を紹介してもらった次第です。四，五日前に京都に行って打ち合わせをしてきましたが、なかなか気さくな方ですので、のんびり聞いていただければよいのでないかと思います。それでは江口先生、お願いいたします。

江口　はじめまして、京都女子大学の江口です。本日はお招きくださいまして、ありがとうございます。市民の皆様のご意見を伺いに参りましたので、僕がしゃべることはほとんどないのですけれど、いろいろこんなことを考えているとか、そんなことを教えていただければと思っています。

哲学、倫理学

私は哲学とか倫理学をやっております。哲学とは何だとか倫理学とは何だとか、学生からもよく訊かれます。それでは哲学とは何なのというと、ひげを生やしたおじいさんが難しそうに考えているイメージがあるかもしれませんが、そんなすごいものではなくて、たとえば、ここにお茶があると見たときに、お茶があると確実に言えるのはなんでやろうとか、考え始めると哲学になる。さば街道が何百年前にあったというけれど、なぜそんなことを信じているのかと考え始めると哲学になる。そう言うときに証拠もなく考えるのはうまくない考え方だろうし、もっといろんな考え方のルールのようなものがあるのでないかと、まあつまり、なにかを考えるにしてもうまい考え方とそうでない考え方とがあるのでないかと考えるのが哲学です。

その中で、倫理学というのは、特に、誰もが気になっている道徳とか人の生き方とかについて考えようというものです。ただ、お前のような人間としてぺーぺーのやつが人の生き方なんかについて知っているのかと言われると、ぜんぜん分かりませんとなるので、どう考えたらいいのかについて考える、言ってみれば、くよくよする、とても消極的なものです。それでは倫理学の問題というのは何かというと、社会のルールとはどんなものなのか、そもそもそれは誰が決めたのか、あるいは誰が決めたのでないのならどうやって決まってきたのとか。今だったら脳死の問題、脳死を死とするかどうかについて、それをどうやって決めるのだろうとか、そういうのが倫理学の一番主要なものですね。もうひとつは、どんなものに価値があって、何が大事なの、あるいは何が大事かをどうやって考えればいいの

か、どう行動するべきかというルールの問題、それをどう考えたらいいのか、そういうことを考えています。

まあしかし大学では実際には、昔の偉い哲学者の本を読んだりして、ここはどうだとか、訓詁学のようなこと、こう読むべきでこう読んではいけないとか、そういうちまちましたことをするのが多かったわけです。そこで最近出てきたのが、応用倫理学で、それはえらい哲学者の孔子様とかカント先生とかを読んでいてもラチがあかないから、社会的な問題を具体的に考えようぜというのが応用倫理学です。ここ三十年ほど、けっこうはやっています。新しい技術や新しい制度が出てくると新しい倫理的問題が生まれるのですね。今一番ホットな問題は脳死の問題で、あれは人工呼吸器ができるとそれによってあいまいな領域が出てくるので、それをどうしたらよいのか考える。できれば解決を考えたい。逆に、そういう具体的な問題を考えていったときに、僕らが本当に大事にしてきたものがよく分かってくるという側面があります。たとえば、脳死の問題を考えたらそもそも命とは何だろうだとか、いろいろ考えさせられるので非常に面白い分野です。私は、そういう生命倫理と今日のテーマである情報倫理の二つを主にやっています。

インターネット

私はインターネットは学生のころ、二十年ほど前から使っていますが、いろいろ面白いし、いろんなことを考えさせられるのでずっと研究を続けています。インターネットは皆さんお使いだと思いますので、どういうものかと説明する必要はないかと思いますが、とりあえず特徴を三つ挙げると、(1)多数対多数・グローバル。みんなで読み書きできるということで、誰かが日記とかブログとかを書くとみんなで見ることになる。いろんな人が書いていろんな人が読む、そういうメディアであるということです。グローバルであるというのは、世界中どっからでも読めるということです。メールなら、アメリカにいる友達であっても、あるいはイギリスの友達であっても、一瞬で届いてしまうのでぜんぜん離れたところにいる気がしない。(2) 匿名がほぼ可能である。これを今日テーマにしたいのですけれど、名前を明かさずに誰かを誹謗したり中傷できる。(3)そしてコピーが簡単。これはあまり注目されていないのですが、同じものを何個もいっぺんに作っておける。

もう少し詳しく見てみますと、一つ目の多数対多数。たとえば、電話というメディアは一対一ですね。手紙も一対一です。テレビ、ラジオ、書籍、雑誌などの従来のマスメディアは、一人の人が書いてそれをみんなが見る。しかし一方向ですね、電話や手紙は双方向ですが、一対一です。マスメディアは一対多で一方向。インターネットはすぐ届くし、双方向だし、みんながウエブやブログを書くと、みんながすぐに読める、そういう特徴を持っている。また、グローバルで地域に限定されないというのは、世界的であるということと同時に、この名田庄で発信しても京都で発信してもウエブ上ではまったく変わらない。

二つ目の匿名とは、名前を隠して書ける。自分の名前がわからないので、正しい情報も書けるし、うその情報も書ける。なんでもいつでも好きなように書ける。名前その他が知られにくいことによって無責任な行動を取る連中もたくさんいます。政府とか大学教授とか書いたものなら一生懸命調べたのだろうから正しいのだろうと思いますけれど、名前を明かさずに書いているのだからあまり正しさが保障されないことが問題になる。

三つ目のコピーが簡単というのは、データをそのまま保存できるということです。いったんネットに流されたものは、そのときすでにコピーされています。「送られてくる」という印象をもつ人が多いですが、実のところ、元のところにも同じものが残っているし、送る途中の場所、インターネット会社や皆様のおうちにも同じものがある。同じものが二個も三個もできる。したがってメールならいろんなところで覗き見することができる。それから、これも無視されやすいことなのですが、ずっと保存できる、ずっと保存されてしまう。場所をとらないものだから消さずにずっと残っている。

　私がコンピュータを買ったとき以来私が書いたものが消せずにずっと残っている。またデータが知らないうちにコピーされていることがあります。これも後でもうちょっと突っ込んでお話します。

コンピュータ通信

　次にインターネット通信の歴史を見ながら、今言った三つの特徴がどういう問題を起こしているのか見てみたいと思います。一九九〇年ごろにはパソコン通信が普及していました。そのころは電話回線を使ってパソコン通信会社と通じて連絡する方法でした。九五年ごろからはインターネットが普及して、二〇〇〇年ごろにはみんなのうちに届いた。そのころから誰でもが携帯メールを使うようになり、電話よりメールをやり取りするようになった。これが大体の流れです。

パソコン通信は一九八〇年末から九〇年にかけて電話回線を使った商用ネットワークで、PC-VAN とか、Nifty-Serve とか、メールのやり取りと「フォーラム」と呼ばれる掲示板と、この二つのを柱にやっていました。私もそのころメールを始めたのですが、パソコン通信のメールではさまざまトラブルが起こりました。ひとつは送り間違い。私がよくみかけたのは、「あの人に送ったつもりだったのに、ほかの人に悪口が届いた」とか、結構ありまして。先生の悪口を書いたのがその先生に届いたとか、ありました。「おにぎりのような頭」とか書いたのが届いたと。それから、感情的な行き違いが多いですね。メールでけんかしている人が時々いました。そのころ、私はメールでのやり取りでけんかすることにすごく関心を持って、いろんな学者たちもなんでそうなるのと、研究を始めた。それが九〇年くらいです。よく指摘されたのは、悪いのは情報不足だということでした。直接に顔を会わせて接しているのなら、表情や雰囲気で気持ちが伝わるし、相手の顔色を見ていろいろ修正するけれど、メールではそれができないとされました。身振り手振り、あるいは雰囲気や目線など言葉によらない非言語コミュニケーション、それが不足しているからトラブルになりやすいのだろうと。もうひとつ言われていたのは、タイムラグ(時間のずれ)とか、読み落とし。例えば、酔っ払って家に帰ってそのまま酔っ払って書いて出してしまう。一晩寝て起きてから書いて出せばいいのに、すぐに出す。そんなのが夜中に届いて、互いにかっとなってしまう、そういうのがずいぶんあったみたいです。

通信メディアの比較

　原因は実はもうちょっといろいろあるのではないかというのが最近の研究から分かってきました。通信メディアをいろいろ比較してみると、人びとはメールが最も話しやすいと思っていることが分かってきた。順番に言うと、テレビ電話は最も話しにくいメディアである。次が対面、次が電話で、電話のほうが対面より話し

やすい。最も話しやすいのがメール、そういう心理学の研究があります。ガールフレンドと話す場合、直接的には言えないが電話なら話せることがあるのでないですか。メールはもっと本音が言いやすいというのが、アンケート調査や心理学の研究で分かってきた。その理由としては、おそらく二つあるのだろう。ひとつは、コントロールしやすいんじゃないかといわれています。コントロールしやすいというのは、しゃべっているときは緊張したり、おびえたり不安だったり、いろんなことが雰囲気に出る。だから相手の反応を見て止まったりするのですけれど、メールの場合、伝わる内容はメールに書いたことだけなので、相手にこれを伝えようとすることがわりとやりやすい。もうひとつは、同じことですが、編集しやすい、自分が思うままに満足いくまで編集できる。この二つの要因からメールのほうが本音を書きやすいだろうということが言われています。心理学では、このことを「自己開示」というのですが、メールのほうが自己開示が容易である。それはつめていくと、他人が直接見えなくて、反応が見えない分だけ自分に意識を集中させて、本当に思っていることを書いている、そのつもりになる。

もうひとつの問題点は、本音の自分を出しやすいと考えるので、その結果、相手もきっと本音を書いているのだろうと思う、そう思い込むことがまずひとつあります。さらにもうひとつは、メールのやり取りをしていると、心理学では「接触頻度」というのですが、相手との連絡回数が増えれば増えるほど、相手との親密度が増えたと思い込みやすいということが分かっています。何度もメールのやり取りをしているとこの人は気の合った仲間だと思ってしまう。なおさらストレートな表現が使いやすくなる。実際以上に相手と親密だと感じやすくなっている可能性があって、本当はただのネット上での知り合いなのに、毎日見ているから「この人とは親しいのだ」と感じてしまう。心理学の研究だと、さらに、相手と自分が親しくて親密で仲がよいと思うと、相手の感情に敏感に反応しやすくなることが分かっています。なので、ちょっと書きそびれたことや、ちょっとした皮肉に反応しやすくなる。いろんな錯覚が、メールで起こりやすいのではないかということが、二十何年間の心理学の研究で分かってきています。

メーリングリスト、掲示板

もうひとつは、掲示板とかメーリングリストとかで、そこでは十人百人二百人で同じメールを読む、あるいは、掲示板で(ネットニュースと言っていたのですが)いろんなことをディスカッションする、そういうことが始まりました。これはメールとほとんど同じ技術なのですね、パソコン上のデータを送るというそれだけのことなので。これで問題になったのが掲示板の「炎上」というもので、激しい言葉の言い争いをものすごくたくさん見ることになります。

私事になりますが、実は、この辺が私が倫理学を研究するきっかけになったのと関係がありまして、大学院生に入ったころにパソコン通信を始めたのですが、パソコン通信を始めてショックだったのは、みんなが毎日罵り合っているのです、なんでこんなにけんかしているのだろうと。けんかしていることは、たいてい、マナーとか、人の生き方とか、意見の述べ方とか、そういう日常的な、道徳に関したことだったのですね。そんなことでけんかしている。そのとき、あれっ、なんでこんなにけんかになるのだろう、道徳やマナーをめぐってこんなにけんかになるのはなぜなのだろうというのがあって、哲学の中でも倫理学をまじめに勉強しよう思ったのは、そういう理由からです。

複数間のやり取りでは、掲示板でのように、一対一のメールよりもやり取りが

さらに激しくなる、やっぱりこれは見物人がいるからだろう、見物人がいるほうがやり取りが激しくなりやすいからだろう。我々は人前で恥をかかされると腹が立つ。これはどんな会合でもそうですね。それからよくいわれているのは、価値観の対立ですね。ネットはグローバルで、本来なら知り合うはずもない人と知り合うわけですね、四十歳の男と、二十歳の大学生と、普通なら話が合うはずがないのに知り合う、そこで、顔が見えないものだから、「なんだお前は！」と罵り合う。そういう激しく対立する価値観があって、お互いに、常識が通じないやつだと罵り合う。そこでの常識というのは、各自が持っている常識なので、僕なら大学教員であることで持っている常識でしかない。非常識だといわれると、自分の持っている価値観を脅かされたように思うのですね。ネット上の常識でも、集まっている各コミュニティーで、掲示板とかメーリングリストとかで、常識が異なっていて、率直な表現を好む集団や、おっしゃることはごもっともです、など丁寧さを尊重する集団もあります。

ネチケット

一九九五年ごろ、人数が増えてきて、けんかばかりしてうまくいかない時代があったのです。そのころに、「ネチケット」、つまりネットワークでのエチケット、の必要性が説かれた。こういうエチケットを守りましょうと、いろんな人がいろんな文章を書いていました、もう一五年以上前になります。たとえばそのひとつですけれど、「送信するときには慎重にしましょう、受信するときには寛大になりましょう」とか。「たとえ挑発されても、激情的なメッセージを返してはいけません、激情的なメッセージを「フレーム（炎）」と呼びますが、そういうのを送ってはいけません。一方、もしあなたが非難されても、驚いてはいけませんし、激情的なメッセージに対しては応答しないのが賢明なやり方です」などなど。また、「自分がある一人の人と意見が一致しないことに気付いた時には、メーリングリストやニュースグループにメッセージを送り続けるのではなく、個別に電子メールで返答しましょう、そのグループが何がしかの関心を持つかもしれない点を討論しているならば、あなたは彼らのためにあとで要約をしてあげてもよいでしょう」「フレーム戦争（感情的論争）に巻き込まれてはいけません、火のつきやすい記事は、投稿してもいけませんし、返答してもいけません」などなど。まあ、お説教みたいなものですが、トラブルのたびに「そのお説教を見よう」、と言っていたのですね。

十五年程前には、そういう、ネチケット集を作ろうと、いろんな人ががんばったのですが、全然ダメでした。けっきょくトラブルは常に生じつづけましたし、「お前のそのエチケットの理解はダメだ！」と、それで、またけんかが始まる。お説教するな、と。説教とはまあそういうものですね。関心の対立は避けがたいところがあって、もちろん、みんな一緒だったらいいのですけれど、それも面白くないので、むしろ、二十一世紀になると、トラブルは起こるものである、トラブルを当然視するコミュニティーの方が栄え始めたのです。けんかなど当然なので、「それに耐えられないやつなど来るな」というわけです。グローバルなネット社会では、むしろトラブルの発生を前提にしたコミュニケーションのほうが優勢になったのでないでしょうか。

WEBページ

九五年ごろから、パソコン通信が終わりインターネットが一般化してくると、ウ

エブページが始まったのですが、これは私の人生上の一番大きな出来事のひとつでした。最初は大学にいる人たちがインターネットとウェブを使い始めたのですね。大学の研究者がインターネットを使って、ウエブの日記を書き始めた。中身は、大学の授業や研究でこういうことをやっていてうまく行かないとか、日常の雑事とか、新聞を読んでこんなことを思ったとかですね、だらだら書く。それをみんなが読んで、そして、みんなの書いているのも自分も読むと。そのころから、私自身は一日一時間くらいネットでうろうろしている生活が始まって、あまり勉強しなくてダメだと怒られる。ウエブ日記の面白いところは人の日記にリンクを張って、この人はこう言っているとかコメントできる。それが面白かったですね。最初は近い研究分野の人と知り合いになったり、そのうち文学関係の人や、違う分野の人と知り合えた。いまだに、そのころ知り合った方と、時々遊んだりメールしたりしますけれど、もう十五年経っているのですが、まだ顔を知らない人がいるのですよ、ずっとお互いの日記を読み合っているのに。もうそのひとの人生でだいたいどんな事が起こっているのか知っているのに。五、六人ですけれど。十五年ぶりにあって、久しぶりだね、しかし全然久しぶりの気分はしないね、というひともいます。もちろん、一部でトラブルは起こります。

これの新しいトラブルは、メールと違うトラブルが起こりました。日記やブログは毎日更新していくものなので、「自分が今日大学に行った」だけでなく、「だれそれと飲んだ」とか書く。ところがその知り合いであるだれそれは大学に行っていなかった、など。いろいろまずいことが起こった。つまり、日記は自分の情報だけでなく、友人や同僚の行動や情報も開示してしまう。我々は一人で生きているわけでないので、日記を公開するとそうなってしまう。他人のプライバシーを侵すことになる。書かれるとすごくいやな人もいました、「俺のことを勝手に書くな」と。これはネットの上だけでなく、現実生活でもトラブルが起こりましたので、トテモ怖いことでした。

匿名掲示板

それから二〇〇〇年ごろになると、匿名掲示板が流行する。「2ちゃんねる」が最も有名ですけれど、八百を超えるテーマ別の、それこそニュース記事から人権問題からご飯のおかずから化粧商品から、実に様々な、ほとんど生活のありとあらゆる話題が巨大な匿名掲示板に現れるようになった。利用者が一千万人くらいいるのでないかといわれています。人口の十分の一、誰でも一回は見たことがあるくらいのものになっています。この「2ちゃんねる」の特徴はほぼ完全な匿名であるということです。それまでの掲示板は一応名前を登録したのですね、江口なら「グッチ」とか、名前を決めてそのたびに明記していた。ところが「2ちゃんねる」は誰が発言したのか分からなくなっている形のもので、これが非常に面白かった。厳密には完全に匿名ではなくて、コンピュータのアドレスなどは記録されていて、犯罪予告した奴が捕まったりしていますけれど。今は警察が記録を出せと言ったら出さないわけには行きません。しかし普通に利用しているぶんには匿名に見えるのですね。もうひとつ「2ちゃんねる」の面白いところは、荒っぽい発言を基本にしてしまったことですね。誰もがいつも荒っぽい書き方をするので、トラブルになってもトラブルと思えない、じゃれているのか、トラブルなのか分からない。それから、トラブルになっても匿名だから誰を攻撃しているのか分からない。もし、江口の名前で書いていたら、江口はダメな奴だといわれるとかっと来るけれど、匿名で書いている分には、プライドみたいなものは関係なくなる。

それから、匿名なので情報の正確さが全然保証されない。京都女子大学江口で書いておれば、その情報はそれなりに保証されるけれど、それが全然ない。ところがそれがまた面白い効果をもたらして、ひとつは、情報が全然信用できないので情報源がはっきりしない情報は信じられなくなった。たとえば、「この本に書いています」「政府がこう言っていると朝日新聞にある」などというように、情報源が書いてあるのは信じられるが、逆に書いてないものは信じられなくなった。それで、むしろ、「どこが情報源だ」とか「ソースは何だ」といった要求が普通の言い回しになっています。

こういう風潮は意外でした。ここらへんは、インターネットの世界はだいぶ変わってきたと思います。匿名でさまざま「裏情報」も出回ることは出回るのですけれど、情報源があいまいなもの、根拠のないもの、疑わしいものはなかなか信じてもらえない。同じことを何回書いていても多くの人は相手にしてくれない。「同じ奴が何回もデマを書いているんだろう」ということになる。「2ちゃんねる」の開設者の西村博之という人は、「うそをうそと見抜くことができなければ掲示板を使うのは難しい」と、そういうことを言っていて、これが「2ちゃんねる」型掲示板のモットーになっている。「うそをうそと見抜ける人だけが使え」と。一見すると永遠に罵り合っているだけで否定的な意見しか書かないように見える。それでもちゃんとした意見は生き残るのです。みんなどんどん批判していくので、その結果、わりとまともなデータがある意見だけが残る。

フリーメール

ただし、悪い側面もいろいろありまして、ひとつは現実の犯罪に使われている。特に今は、フリーメールといって無料でメールアドレスが取得できるのがある。Google や Yahoo!など、いろいろありますが、そういうところからいっぱいメールアドレスを貰う。そして次々に何段回もアドレスを乗り換えていくと、確かに届くけれど、警察などが追っかけることがほとんど出来ない状態にすることが出来る。この画面は違法の薬品を販売するサイトの例ですが、ここで「薬品(覚せい剤ですけれど)を売ります、ここのメールアドレスに連絡してください」と。このようなのが頻繁に出回っています。おそらく警察も見ています。確証があれば捕まえるつもりでいる。「どこどこに行けば売っています」というようなのも出ているようですが、そういうサイトみんな知っています。「大麻売ります」とか出てきて、学生や若者には危険だなと思いますけれど、こういうのがあると、むしろ、警察が捜査しやすくもなっている。いいところもあれば悪いところもあるという感じですね。もうひとつヤバそうなのが自殺サイトというやつですね。これも「2ちゃんねる」ですが、これがその例で、「本気で自殺したい人メールください」とある。一番最初のタイトルが、「一緒に死にましょう」。これは一時期本当に危険になりまして、「2ちゃんねる」はみんなが見ているのでそうでもないかもしれませんが、もっと小規模なところは危ない。知られていない掲示板のほうが過激になりやすく危険だと思います。それから、インターネット上には自殺の方法だとか流れていますので、その人たちが連絡を取って、どういう方法を取ればよいのか検索して実行する。そういうデータがあまりにも広くなっているので、止めることが出来なくなっている。

コミットメント

情報があるというのと会話する場があるということだけが問題なのかというとそうでもなくて、それは社会心理学、—これは人間関係を研究する学問でいろいろ面白い研究が進められています—によれば、なぜ人は掲示板などで自殺まで行ってしまうのかなど教えてくれる。普通僕らから考えると、メールでやり取りしただけの互いに誰も知らないもの同士が一緒に自殺するのはなんでだろうと思うんですが、ひとつは「コミットメント」というものがあります。「コミットメント」は、訳しにくい言葉ですが、関与するとか立場を明確にすることです。僕らはいったんなにかに自発的に関与すると、その態度を首尾一貫して維持しようとする心理が働くことが分かっています。

例として、これはアメリカでの実験ですが、まず署名運動に参加してもらうのですね、「カリフォルニアを美しく保とう」という署名をお願いする。そうすると、「カリフォルニアを美しく保とう」だと反対することもないからたいていの人は署名してくれる。次に、二週間後に、署名してくれたどこかの家に行って、大きな五メートル四方の「安全運転しよう」という看板を立てさせてくれませんかというと、普通だとこんな大きな看板を立てるのに賛成するのは十七パーセントくらいなのに、いったん署名した人たちは半分くらいオーケする。それはなぜか。「カリフォルニアを美しく保とう」といったん署名すると、私ってみんなことを思っているえらい人だと思うようになる。そのあと、みんなのことになることをしませんか言われると賛成する。さらに一貫した態度を取るようになるということです。協力的になる。なかなか面白い実験です。これはいろんなところに使える。たとえば商売にも使える。たとえば、車を売る場合、最初に家に入れて説明させてもらえれば、その先買ってもらえることが多い。

その他の例として、一九五〇年代の中国軍では、朝鮮戦争で捕虜にした米兵にアメリカ批判や中国礼賛をノートに書かせたそうです。書いたらタバコをあげるから心にもないことでよいからともかくうそでもよいから書け、書くことがなければこの見本を写せ、そしたらタバコをやるからと。われわれはなにかを書くとそれを信じる傾向があることが分かっていて、心にもないことを書いたのだからどうってことないと思っている人を洗脳していく。そういうことが行われていた。

今の話と掲示板とどういう関係があるというと、掲示板というのは、あれは自発的に読み書きするのですね。そこでたとえば、自殺系にいったん「私も自殺したい」と書してしまう。最初に「自殺したい」と書くとその態度を一貫したいという傾向になり、ますます、私は自殺したいのだと思い込むようになる。結構恐ろしいのですよ。さっきのけんかになる話も、これと関係あるかもしれない。つまり、たとえば、脳死反対と掲示板に書いちゃえば、その結果、脳死反対って何だと言われたときに、ますます脳死反対のままの立場を取ろうとして、極端な方向に進む。頑固な人ですね、となる。たしかに我々いったん立場を明確にすると、その立場をよりはっきりしたものに進めちゃうんですね。これは人間の心理のすごい問題で、社会心理学は七十年代から八十年代にかけてみんなの驚くような発見をしています。昔からみんなうすうす知ってはいたのですが、それがデータを集めてちゃんと学問的に証明された。

ブログ

ブログなんかも、たんなる「日記」からはじまって、今は自分の主張や意見を書く場として盛んですね。ブログには、コメント(記事に感想を書ける)とか、トラッ

クバック（他のブログで言及するとリンクされる）とか、ありますが、最近は一般市民のブログが「炎上」することが多くて、これは、本人は楽しく日記を書いていたのに、いきなりみんなから非難されてびっくりすることがあって、結構悲惨なケースが見られることがありますね。なんというか、「義憤」にかられた人がブロガーの所属団体に抗議するなんてことが最近起こってきている。ブログは掲示板と違って誰が書いているか分かりやすいので、変な意見を書くと、「なんて変な意見を書いているのだ」と、その人の所属している団体に抗議してくる。たとえば私が趣味で書いているのに、京都女子大の江口がこんなことを書いていると大学に抗議する、そんなことが起こっている。どっかに所属している人はピンチになることはあります。二〇〇三年ごろから注目されていて、有名なのは千葉県の主婦が、夫婦で居酒屋の対応が悪いと店員に土下座させたことがあって、それを自分のブログに「土下座させたよ」と書いた。それを見て、こんなやつらがいると、掲示板である「2ちゃんねる」で話題になって、大量の非難コメントがとどいてブログが閉鎖になった。それから、「きんもーっ☆事件」といって、若い女のアルバイト店員がブログで若い男のお客さんが太っていて「きんもーっ☆」って書いた。うちの店にはきんもーいお客ばかり来ると。それを掲示板で、それは俺らのことやろーと、店に直接電話をかけたりして苦情が殺到して、謝罪させられた。さらにそこで問題になってくるのは、コピーが簡単ということですね。いったんこんなことを書いたら消しても消えない、すぐにコピーされて、そいつはこんなことを言っているとなる。本人は消してといっているけれど、もう消えない、ほかの人にコピーされてそのまま保存さているので。

無責任、新しい規範

もうひとつ、炎上で問題になるのは、匿名ですが、匿名になるとなぜ炎上するようなことが起こるのだろうと研究されています。これもずいぶん前から分かっていることで、暴動の研究とかで、人は集まると暴動になりやすいと分かっていて、それらは昔から社会学とか心理学の研究対象でした。名前が分からないし、責任はみんなでやっているから個人にない、というようなときは、我々は反社会的な行動をしやすくなるということが分かっています。匿名と無責任は関係がある。匿名、つまり自分の名前が消えたような状況では自分自身の行動の監視がおろそかになる。俺がやっていることはやっていいことかどうか、許されることかどうか、考えなくなって、衝動的に行動するようになる。これは経験的に言われています。バーゲンのときなどそうですね、わーっといってしまう。みんなが動いているときは、理性的に行動することが出来なくなる。さらに、最近の研究で面白いのは、匿名の集団になると、その中で自発的に新しい規範が発生しやすくなる、たとえば、デモをしていて、警察が邪魔すると妨害する警察には石を投げ始める。石を投げないとダメとみんなが思い込み始める。それが正義だとその場で思い込みやすくなるのですね。さっきのブログの話に戻りますが、ブログで、「きんもーっ☆」と書いたり、夫婦が土下座させたと書くと、それを読んだ人たちは、反社会的なことを書いているブログは攻撃するべきだと思い込んで、ちょっとしたことを書いているだけなのに、みんなはそのちょっとしたことを攻撃し始める。これはほとんど暴動です。非常に問題だと思います。

ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)

最近の流行として、Wikipedia（ウイキペディア）とか、mixi（ミクシー）などのソーシャルネットワーキングサービス(SNS)ですが、これも匿名ですが、面白いのですよ。ウイキペディアはオンライン百科事典ですが、これを書いているのは匿名ですが、匿名でも人数が集まると正しい情報になってきます。みんなでちょっとずつ書き加えていくと正確になっていく。出典の明記などのルールによってかなり正確なものになって行きます。ウイキペディアは匿名でもうまくいく例です。

今はやっているのが SNS（ソーシャルネットワーキングサービス、あえて日本語に直せば、「社会的ネットワークをインターネット上で構築するもの」ということになりますが）、これはブログと違って、人と人とのつながりをそのままネットに移したようなもので、お互いに素性の分かっている同士がネット上で繋がり合うという形のものですね。特に有名なのは、mixi（ミクシー）で、互いに知り合いのもの同士がつながりあって友達になる。実名や人間関係が分かりやすいですね。基本的には自分の日記を書いて、それを読んだ人がコメントする。友達同士のやり取りを知ったもの同士がみんなでやるようなことです。ミクシーの特徴は誰が読んだか分かる、「あしあと」が残る、ということですね。そのほか、MediaMaker（メディアメーカー）といって、読んだ本とその感想を書くのがあり、同じ本を読んだひとの感想などが読めたり、似た読書傾向のひとを発見したりできます。last.fm という、これまで聞いた音楽、現在聞いている曲などを表示できるものとかがあります。これらで、関心やテーマ別に人々が繋がっていく。

モバゲータウン、前略プロフィール（プロフ）

今、中高生ではやっているモバゲータウンというのがあります。これは携帯電話で友達を紹介しあうのですが、携帯小説とかゲームなどがただで出来るので、すごく普及しているみたいです。これは携帯に表示された例ですが、上に小説があって、その下に有名人のブログ、占いや運勢も載っています。下のほうに「友達を探す」があります。これは地域的に登録されて、京都なら京都、福井なら福井で登録されて、お友達募集とか、男の子も女の子もやっています。これは京都での例ですが、「XX短大に行っていますー、出会い目的はいらーん」などと書いてある。女の子で登録すると、知らない男の子からじゃんじゃんメールが来る。これも学生に調べさせようかと思っているのですが、結構危険なのです。もうひとつはやっていて、危険そうなのは、「前略プロフィール」といって、これは新聞などで、女子中学生に裸の写真を遅らせて逮捕されたというのが、ぽつぽつ出ているのでご存知の方がいらっしゃるかもしれませんが、あれがこれですね。自己紹介するサイトなのですが、携帯から直接書けて、「写メ」といって携帯で撮った写真をそのまま送られるのです。これが特徴で、地域をキーワードにして探すとそこに登録されている人数が分かります。名田庄で探すと五人出てきました。一人はレゲーが大好きとか書いています。このような機能を利用して、近くにいる子を探して、お友達にならないか、といって連絡する。あまり実質的な内容はないのですが、中高生用の出会いの場みたいなものです。日記とか、自分専用の掲示板が付いています。

SNS の問題

こういう SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）の問題点は、本人が特定されやすいことです。もうひとつは、自分が特定されるだけでなく、周りの人も全部特定される。関係を追っていくことで、そのひとの人間関係が他に知られてしまう。知らなくてもよい人に情報を与えてしまうし、そういう知らなくてもよい情報を知ってしまう。たとえば、ヌードフォト事件があります。これは二〇〇六年ごろすごく問題化したのですけれど、ファイル交換ソフトが原因でデータが流失したのですね。ガールフレンドのヌード画像のデータを会社員が流出してしまって、それに会社員の実名が入っていた。そのサラリーマンの実名を mixi で検索したら、その人が特定された。彼女も特定されて、その彼女から会社まで特定された。そのカップルの本名と会社名が分かった。一流企業だったので、ネットでさらされて大変なことになった。

やっぱり、コピーが簡単ということが問題になっていて、ネットのサービスを使った情報が漏洩したりすることが結構ありますし、今ではもう、情報をもっている本人がどこにデータがおかれているのか分からないことが多いです。携帯で写真を取り込んだとき、そのデータがコンピュータにあるのか、ネットにあるのか分からない。誰も分からないのです、僕自身も分からない。さらに、いったんネットに流れた情報は二度と消えない。さっきのヌード写真もいまだにやり取りされている。写真などはほぼ永久に残るかもしれない。データが消えないために、必ずバックアップを取って下さいといわれる。そのバックアップのせいでいつまでたって消したいデータが消えない。作ったデータは二度と消えないことは子供たちに教えておかないといけない。

SNS とか、これからは益々いろんな問題が起こってくると思います。哲学者としては、そのときに何が危うくなっているのだろうということは考えたい。危険だ、というのは分かるのですが、危険なだけなのだろうか。それなら、匿名などやめてコンピュータネットワークを壊せばいいのか。その結果、何か大事なものは無くならないのか。あるいは、コンピュータのいいところはこういうところだとか。そういうことを考えたりするのがわれわれの仕事です。

プライバシーはなぜ重要か

プライバシーなどの個人情報がなぜ重要なのだろう。プライバシーというのは、名前、職業、住所などの個人情報、行動や人間関係、あるいは思考、感情、秘密などですね。それがなぜ大事かというと、ひとつはさっき言った、危険性ですね。悪意ある人に見つかったら何されるか分からない。たとえば、デマでも流せます。ある程度の情報さえ知れば、江口は名田庄に遊びに行った、などとデマ情報を流すのは簡単です。医療情報の場合は、もし医療情報がばれれば、その人は採らずにおこうとか、就職活動などに影響する。普通、人は身体の情報は隠したくなる。政治的見解も、偏見とかにさらされるかもしれないということから、隠しておきたいかもしれない。あるいは、就職とか結婚とかローンなどの際に、就職や結婚やローンなどの判断に無関係な情報が使われるのは困るということがある。偏見とかにさらされる可能性もありますね。就職だったら、就職で重要なのはちゃんと会社のために働くかどうか、能力があるかどうかということが大事であって、政治的にどうかとか、何教を信じているかどうかなどは、会社で働くこととは関係ないことです。関係ないことに使われたらかなわん、というこ

とからプライバシーが大事だというわけですね。それに交渉などで何を考えているかを他の人びとに知られると不利になりますね、不利益になる。さらに、プライバシーが守られないと、他人からコントロールされやすくなる。「見られている」という意識によって行動が変ってしまうことがあります。誰もが行っている、たとえば、トイレに行くとかでも、それは人に見られたくないので、きまりが悪いとかはずかしいとかの感じは、誰にでもある。

　我々には、だれにも見られない、知られないということがないと生活が安定して生きていかれない。危険性とか不利益で、プライバシー保護の重要性がわかります。ただし、それだけではない。さっき、私は、mixi をやめたといいましたが、それは別の意味がありまして、ウェブ日記やブログにはいろんなことが書けるのですが、mixi は、すごく居心地が悪かったですね、私には。何で悪かったのかというと、こう、mixi では学校の学生と、昔からの友人と、高校時代の友人と、いろんな人間との人間関係とコミュニケーションが一緒に見られちゃう、これがすごく気持ち悪かったですね。何でかというと、われわれには、親密な関係、特別な関係が、たとえば、妻とか子供とか友人とか、この人とは特別な関係であるということが必要なのですね。誰にでもなんでも喋るわけにはいかない。友達と友達でない人の一番の違いは何といったら、友達には本音で話ができるけれど、そうでない人には身構えるところがある。逆言うと、むしろ、お前友達だからこれしゃべるぞと言うために秘密が必要、あるいは、秘密を分かち合うことで友達になるとも言える。つまり、本当の自分というのがあるとしたら、その本当の自分にいつも仮面をかぶって生きているところがあって、それをあなただけに見せますよ、と。隠れ座敷や、秘密の庭園、そういう特別な人専用の場所が我々には必要なのですね。また、私たちは皆場面場面によっていくつかの「顔」を使いわけていて、それは親であったり、教師であったり、飲み屋の客であったりと、違う人間関係にたいして違う顔をしている。そういうのは、裏表があるといいますが、しかし、裏表のない生活は息がつまるし、奥行きがないですね。親しくなっていくと、あれ、この人、こういうところがあったのかと思ったときに、奥があるなと思う。そういうのは必要ですね。

　われわれはこうしてわざと人に見せないとか、わざと見せたりすることで、いろいろな人間関係をコントロールしているのですが、SNS の問題というのは、そういうプライバシーを私たちから奪ってしまうかも知れない。他人に知られたくない秘密が知られてしまう。「お前、飲み会に連れて行ってやる」といってある人を連れて行ったのが、楽しかったと書かれて、その人だけだったのがみんなに知られてしまう。SNS のもうひとつの問題は、人間関係や友人関係などをテクノロジー化して見えるようにしてしまうことです。たとえば、友人が皆 mixi 使っているから読まないわけにはいかない、入らないわけにはいかないということになる。入らないと友達の数が少なくなってしまうかもしれない。それから、友だちが「日記を毎日読んでくれているか?」が気になり、ずっとパソコンに張り付いていなければならなくなり、「mixi 疲れ」と呼ばれることが起こる。モバゲータウンなんかもそうらしい。だれが自分の書いたものを読んだか分かりやすいので、ずっと気にしていなければならない。

　これはニューヨークタイムズの記事の写しですが、「わたしの友人は生徒に人気の中学教師です。彼女は Facebook(これは mixi みたいなものですが)にアカウントを持っていて、多くの生徒から「友だち」として登録されており、かれらの書き込みを読むことができます。その結果、彼女は生徒たちについていろいろなことをたとえば、未成年の飲酒や麻薬の使用、時にはテストでのカンニングや宿題

のズルなど学校に関連した問題行動などを含めて知ることになりました。彼女は、これらのことを学校や警察、家族に知らせなければいけないでしょうか？学校には、この現代的な問題に関する規則はありません。」こういう問題がこれからおそらく起こってくるだろう。

つまり、今までは、大人が子供の社会のことをあんまり知らなかった、何にしゃべっているのだとか。その方がよかったかもしれないと思います。これからは、子供が何をしているか親が見ちゃう可能性ができます。大人同士が話をしているのを子供が見聞きすることが、これからどんどん増えて来るでしょう。このようなことが、これから SNS がもっと普及していくと問題になることだと思います。お互いに隠しておきたいこと、大人には大人のそれがあるし、子供には子供なりにそれはある。それが脅かされる可能性がある。私が mixi やめた理由は、学生たちと仲よくなりすぎる傾向があったので、読まなくてもむことを読まされて、恥ずかしいし、私が友人たちとネットでやり取りしているのを見られるのもいやだし。あんまり毎日見ていると、過剰に親しい感じにもなってしまう。学生から、毎日先生のブログ読んでいますとか、mixi 読んでいますとか。子どもにはこれから誰に何を知らせてよいかを学ばせる必要がある。みんな読んでいるのだよと教えないとこれからいろんな問題が出てくる。

まとめとして、個人情報のネットへの持ち出しはかなり危険で、SNS は私たちのプライバシーを脅かす可能性がある。しかし、一方では SNS は新しい人間関係を開発する力を秘めているが、慎重にやっていかない。中高生や大学生に関しては、危険もあるが、だから楽しいという面もありますから、我々としては、こういうことをすればこうなるとかの、ネットワークの仕組みに加えて心の仕組みや特性を学ぶ必要がある。教育に関して言えば、技術は毎日進歩していて、全部を教えるのは無理なのです。僕らも毎日新しいことを発見していくくらいで。だから、利便と危険性のすべてを教えることはできないので、自分でそれらがどの程度危険か学んでいける、そのことを直接教えるのでなくて、学び方を教える、そういうことが必要になってくると思います。

講演後の質疑応答

早川　はい、どうもありがとうございました。ここで質疑応答に入りたいと思います。いい機会ですので、なんでも質問してください。

携帯電話

参加者Ａ　先日の報道によると、石川県では携帯を小中学生に持たさず、規制をすると言うことでしたが、私が携帯を買いに行ってメールの出来ないのはありませんかと訊くと、ありませんと。次に、カメラのないのはありませんかと訊くと、これもありませんと。本当にないのか。子供に携帯を規制するよりは、電話機能だけのを作れば技術的なところから解決するのでないか。これが一つ。二つ目は、私、年齢的なこともあってメールの送信を間違うことがあるのですが、先ほど一度送ったメールは消せないといわれましたが、これは、技術的に消せないのか、なぜ消せないのか、この二つです。

江口　今言われたような携帯はあるとおもうんですが、やっぱり、売れないんですね、いろいろ付いていたほうが便利なので。僕なら子供用に開発して持たそうとは思います。消せるかどうかということですが、これは本当に技術的に無

理なんです。（図を描いて説明）ここにコンピュータがあって、相手のPCがあって、ここで送信とすると、ここにコピーが出来る。データが送られるというより、同じものが両方に出来る。相手に届くまでに二、三台のコンピュータが介在するとそのたびにコピーが作られる。昔は時間がかかって相手に届いたが、いまは一瞬のうちに届いてしまう。だから、そのいちいちを消すのは無理です。これは技術的に無理なんですよ。Google がやっている gmail だと、十秒間だけ送信を待ってから送る、というふうに設定は出来ます。だからその間なら取り消しが出来る、取り消しが出来るというより、送らないということです。これは便利で、僕もよかったと思ったことがありました。

早川　非常におおざっぱな印象ですが、今までのお話を聞いていると、世の中だんだん悪くなっていくというような気がしたのですが。

江口　僕は人生の比較的早い時期から使い始めたのですが、得たものはすごく大きい。私はあまり社交的でないのですが、私のようなものには、書いたもので意見を交換するのはとても良かった。人見知りする人間にとってはよいものです。プライバシーを見せることでほかの新しい人と知り合いになれますね。

　車が出来てこらへんの生活も変わったじゃありませんか。車が出来てどうなったかというと、親戚と離れて住むようになった。昔はぴったりくっついて生活していたが、車で三十分なら大丈夫と、それで離れて行く。技術が生活を変える。

けんか

早川　メールでけんかするという話がありましたが、けんかって面白いのでないかと思うのです、だからする。面白くてやっているのではないか。人には何か本質的にけんかしたい部分があって、それを助長する装置（メール）が出来たので、やっているという印象です。

江口　ああ、それはあるかもしれないですね。メールで長いこと延々けんかしている人はみたことない。しかし見物人がいるときは延々とやっている。一ヶ月くらいやっている人がいますが、あれはなんなのだろうと。あれはやっぱり面白いのだと思います。叩き潰し始めたら完膚無きまで叩き潰したい、みたいなものがあるんだと思います。ブログとかでも延々とやっている人がいますが、しかし、人はそう簡単に意見を変えることはないのですが、首尾一貫しておりたいと思うから。簡単には変わらないのに。変わらないからこそやっちゃうのでしょう。私自身はそうした喧嘩にそれほど巻き込まれたことはないのですけれど、巻き込まれる人は一瞬のうちに巻き込まれる。そういう人は日常生活を見ていてもけんかしているので、タイプがあるのでしょう。パソコン通信を始めてすぐにけんかし始めた人がいましたが、ずっと見ているとそれからも大きなけんかをしている。人に迷惑がかからない限りは別にどうって言うことありませんが。

匿名性

参加者B　私も職業柄論文を書いたりするのですが、そのとき査読っていうのがあります。査読っていうのは、自分の書いた論文を他の人が読んで、この学術雑誌に載せるには、ここがいいとか悪いとかここが間違っているだとか、査読しているほうはたぶん親切にやってくれていると思うのですが、それを読むほうはこんな細かいことをいちいち面倒な、分かっているのに、わざと上から教えてやっているような態度で、と思う。査読は日本の場合は査読者が匿名なんです。外国の

場合は署名して、私はこう思いますとはっきり書いてくる雑誌もあるのですが、日本はそうでない。私はそのほうがいいと思っています。で、今夜の話を聞いていると、ブログなんかでは匿名である、だから激しいやり取りになる。雑誌の査読でも、実名になったら、ああいう人間はああいうことを言っているとすぐに分かるので、そんなこと言わなくなるのでないかと思うのですが。論文の査読の匿名性と、ここで言っているネット上の匿名性と、なんか似たところがあると思って聞いていました。

江口　ブログの炎上とかでは、匿名が多いのですが、けんかとかは実は昔から実名でもああいうことはやっていたのです。実名だからこそやっていたところがあって、コミュニティーの中で偉くなるために他の人をやっつけることはいっぱいやっていたのです。「2ちゃんねる」という、ほとんど匿名のところは、いつも激しいやり取りはありますけれど、昔の実名の掲示板ほど激しくならないですよ。いつの間にかみんな飽きちゃう。学術雑誌の査読の場合、もし査読者が実名で出てきたら本気でけんかすることになるのでないですか。僕の場合なんか、論文を書く場合、当然実名で書くのですが、その場合、名前をあげたというのがあって、そういうのが一生懸命書く原動力みたいなものですが、匿名ではそうはならないのではないか。けんかするときも、きっと、そういうのがあると思います。むしろ、名前を消したほうが平和になるかも知れない。

自殺サイト

早川　自殺の話がありましたね、知らないもの同士が集まって集団で自殺するという。あれを止める方法としてはどういうのがありますか。

江口　「2ちゃんねる」だと、止めとけと、それを見た人がなにか書く。説得する。掲示板を見張っている健全な人が結構いて、そういう人たちが止めとけと書きます。ああいう大手の場合は、「止めとこうよ」とか、「もっといいことあるぞ」とか書きます。「今特に気分が落ちているだけかも知れないから、止めとけよ」とか、「こういうチェックリストがあるから試してみたら」とか。そういうチェックリストは答えているうちに非常にポジティブになってきて、自分も明るい将来があるぞと思えるようなリストになっている。そういうのを紹介してくれています。だから、そういうわりと大きいのは安全なのです。危ないのは、ちっちゃいところで固まっていると、人の見ないところで知り合っちゃうと、危険な方向に進んでしまう。

早川　小さい大きいというのは・・・・

江口　参加人数が多いか少ないか、です。参加人数が少なくて限られた人でやっていると、一方向に行きやすくなる。宗教のカルト集団がそうですね。人数が多いと、いろんな意見があるので、だいたい穏やかなところに納まる。「2ちゃんねる」のようなところでわーっとやっていたほうが安全かも知れません。検索で最初に引っかかれば大きいところですから、止める人もいっぱいいる。あとは、そういうところをずっと見ていて警察に通報する人もいます。これも効果があるみたいで、実際何件も止まっているみたいです。「これから死にます」みたいなことを書く、だれも本気で死にたいとは思っていないので、そう書いた人になにか書いてあげれば、なんとかなる。

早川　それは年齢は関係ないのですか。

江口　うーん・・、それはそこまでは。一番問題になっている中年男性なんかはそういうことを書きません。あの人たちはこういうところに書く余裕はないかも

知れませんね。最近の研究だと、こういう孤独感はネットだと下がるので、セラピーというか、効果はあるかも知れないとあります。社会的なつながりをもっていない人もネットだったらやっていける、そういう人もいるようです。

匿名性による義憤

参加者Ａ　先ほど査読のところで、匿名性の話しがあり、「匿名性による義憤」という言葉が出てきましたが、「匿名性による義憤」について私は危なさを感じるのですが。これはネットだけの問題でないと思うのです。何年か前、イラクにボランティアーで入って人質になった、確か高遠さんという女性が日本中からバッシングされた。あれはやっている人は義憤だと思ってやっていると思うのですが、義憤ということにまやかしを感じるのです。匿名性の場合も、義憤だと思ってやっているのも、実は単なるいじめに過ぎないというようなことでないかと。その辺がネットの匿名性の一番危ないところでないかと思うのです。一番定義の難しい言葉でないかと思っているのです。

江口　確かに不用意に使っているというか、かっこ付きの義憤というか。自分たちは正しいと思っているのですね。ネットを炎上させる人たちは、自分は正しいと思っているからエネルギーがあって。子供のいじめもそういうところがあるのですね。俺は悪い子だからあいつをいじめると思っていじめているものはあまりいない。あっちの子のほうが悪い、おかしい、先生に告げ口した、などなど、「俺たちがちゃんとしてあげなきゃ」と思ってやっているのではないでしょうか。そういうケースがあっていじめているのでないかと僕自身は思っています。「俺は正しい」という感覚はすごく危ない。常に危なくて。正しい人たちは困るなど。むしろそれは正しくないのだというのが僕らの立場ですけれど。どうしたらいいか分からないですが、ネットでまずいことが起こっているのは、自分たちが正しいと思っている人たちが、社会からちょっと外れた人たちを叩きに行っている。そういう側面があります。匿名だとみんな勝手なことをするからというのでなくて、ひとつの、こう、通念みたいな、大体こんな感じみたいなことに合わせていって、そしてそれはもしかしたら、出る杭は打たれるみたいな社会になっていく可能性は十分ある。だから、匿名の社会がいいかどうかは分からないですね。ただ、そういうものに負けるのもダメだという気もするのです。匿名の有象無象に負けずにがんばってほしいというのもあります。

子供たちにどう教えるのか

参加者Ｃ　いま、パソコンを使う世代はどんどん下がって行っていて、小学生や中学生でも使っている。それはすごく便利でいいのですが、プライバシーの問題とか書き込みの問題とか、いろんな悪い面がいっぱいあって、そういう点を子供たちにどんな風に教えたらいいか、それは本当に教えられるのか。教える人がいないのが現実のような気がしますが。いろんな問題が起こっているので解決できるのかと思うのです。

江口　小学生などには刺激が強すぎるのでないかと思います。子供向けのページやなどがあって、これは子供しか読めないようになっています。二〇〇〇年ごろに小中学校の先生方には子どもにインターネットを使わせるのは早いんじゃないのと言っていましたが今でもそう思っています。その当時お会いした高校や中学校の先生は詳しいのですが、周りの人たちは何のことか分からないのです。小学

生にも中学生にも要らないと思うのですが、もうだめなのでしょうか。

参加者C 危険性をどうやって教えたらいいのか……

江口 その危険性を教えることとそのことが、危険性を見せることになるので、どうやって教えたらいいのか難しいですね。

参加者B その問題は実は私も昔自治体に言っていたときに考えたことがあるのですが、たとえば、新しい町で道路が出来たので信号を付けろと要望が出た。車があまり通らないところになぜ信号を付けなければならないのかと、私は、そういう必要があるのかと訊いた。将来この道は車がいっぱい通るから信号を付けたほうがいいですよという回答だった。しかし、それはあまりにも形式的な話であって、危険になれば危険になった時点で付ければいい話であって、本当はもっと言えば、子供に危険とは何かということを体験させなければいけないと思っています。その体験をいかにして大人が教えるか。今先生が言われたように、教えるには年齢があって、年齢にしたがって、こういうことはこの年齢で教える、こういうことはまたこの年齢で教えると。そういうことを大人が把握していないと、今の世の中にあるようなごちゃごちゃの話になってくる。

江口 その通りだと思いますね。最終的には私らは一人で歩けるようにならないといけない。その歩き方は転ばないと分からない、自転車だって転ばないと学べない。その点はいいのですが、インターネットそのものは高速道路なんですよ。八車線ぐらいあるようなところを飛ばしているのでどうなのかと。うまいこと転べるようなところ、たとえば狭い範囲、学校などから出さないとか。そういう風だったらいいですけれど。以前そういう議論もしていましたが、結局今、現場ではあまり使われなくなりましたね。学校ではとりあえず、「調べ学習」で使うということで、見に行くことはするけれど書くほうはあまりしなくなった。昔はメールのやり取りをしてみようというような教え方でしたが。技術的に、たとえば、掲示板とかに書かせないというようなことは、難しいことなので。

参加者B そういうことは、インターネットでなくてイントラネットを作ってまず訓練させる。たとえば、ここでなら、ひとつの学校内でなくて小学校中学校全体でネットを組んでそこで訓練する、そうすればすぐ分かる理解できると思います。

江口 その通りだと思います。うまいことといってほしいと思います。

早川 学校ではどのようなことを教えているのですか。

参加者D 小学校ではさっき言われたようなことでまず見てみる、調べる。中学校では技術科の中で授業があり、情報モラル教育をやっていますが、この世界はどんどん進んでいるので知らないことがいっぱいあります。この資料の最後に「教育の必要」とありますが、できましたらここを少し詳しく説明してほしいのですが。

江口 教育の話は難しくて、さっき言われたように転ぶことを教えることが必要で、ともかく最終的には自分で立てるようになる、それをどうやってしていくか。実際に失敗させたりする。さっき出さなかったのですが、子供向けのサイトがあって、十五才以下の子は親御さんの許可を貰ってくださいね、と書いてあるが実際は子供たちからいろんなデータを吸い上げている。そういうビジネスの場に乗っかってしまうとかなり危険ですね。ビジネスというのは、いろんなことをしてお金を儲けようとしているのだよとか、基本的な発想から教えていかないといけないのでないかと。技術的なことよりは、もっと、自分たちが利用されたりするし、世の中には悪い人がいっぱいいるし、などと教える。携帯のほうが進歩ははるかに早いので、おそらく、子供たちはそういう教育現場より早く使い始めるし、おそ

らく、中学生くらいなら早いでしょう。

子供を監視する

さっきのSNSのときに言いましたが、新しい問題のひとつは、むしろ、今までは子供同士の秘密だったことを親がひょっとしてコントロールできるようになるかも知れないということです。いじめの問題でも親が関与する場合もしない場合もあったと思うのですが、これからはコントロールしやすくなるかも知れない。学校がその気になってネットを監視すれば、どの子とどの子が関係しているか、発見しやすくなる。ただ、それがいいことなのかというと、それもよく分からない。子供にメールのやり取りをさせたら、だれがだれと仲がいいか一発で分かります。記録が全部残りますので、どの子からどの子に何通いっているとか、この子は誰かに届いていないとか、そういうことが見やすくなるが、それも良し悪しがある。大人がこういうことを見ているよ、ということを、子供が知らないままにさせることに僕は賛成でない。こっそり後ろから見ています、というようなことが出来るのかなと。ちょっと不安なんですよ。小学生の低学年なら親の言うなりですが、中高になってくると親から離れてこそこそ悪いことをはじめる。その年齢ではいろいろ葛藤するわけですが、それを親は全部見てましたよというのは、いやな世界だなあと、僕は思うのです。学校の現場でネットを管理している先生とかはそれらを知っている可能性がある。(黒板に図を描いて)学校ではこのあたりにサーバーを持っているので、ここを通ってメールが出ていくので、見ようと思えば見られる。ホームページを見ても、だれがどのホームページを見たか分かる。学校関係のコンピューターはすごく危険です。学校の先生はいろんなデータを取って見

そうなんですよ。プライバシーは尊重しろとなっているが、実際のところはそうでもない。一部の学者は見えないようなコントロールをしろと言っている人もいます、そのほうが安全だと。

プロバイダー

参加者E 今の話を聞いて、プライバシーのことが気になったのですが、一般の場合、プロバイダー会社を通じてやっていますが、この場合は・・・。

江口 プロバイダー本人は分かっていますが、記録は六ヶ月くらいしか残しませんから、そして、プロバイダーのほうは我々一人ひとりに興味がないですからそれほど危ないことはないが、学校はそうではないと思います。

参加者A プロバイダーで、ここは信用できるけれどここはダメだとか、そういうのはありますか。

江口 いや、プロバイダーはどこでも同じだと思います。大丈夫です。通信事業者は大丈夫なんです。機密を守る法律があってそれに従っていますから。学校は通信事業者でないので、学校の内規で決めてないのですね。しかも、少数の人がやっていて、だれが何をしているか、互いのチェックが出来ていない。たとえば、Yahoo!のメールにすぐに転送するようにしておいたほうが安全。

参加者E プロバイダーの中に悪意を持ったものがいてある個人をターゲットにすれば出来るわけですね。

江口 それは出来ますが、そういうところでは複数の人が管理しているので、そう簡単には出来ないですね。ある人の情報を見たということ自体がまた別の情報として残るので、グループの中では見たということが分かっちゃう。会社でも

そういうことをするのは結構難しいと思います。あと、コンピュータにはいろんなデータが残っています。履歴とか見たら一目瞭然です。大学でもあったんですが、コンピュータを全部繋いで、その仕組みがよくなくて、ほかの人が何を読んだのか丸見えになっていた。いろいろいやなのを見ていたのが丸見え。私がその大学に入ったその年で、私、その前の大学で管理もしていたので、自分のデータが安全かどうか試してみたら、まったく丸見えで最低でした。

どんなことも見られ得る

参加者Ｂ　大事なのは、みんな分かるよということを知ることが大事。

江口　そうなんです、そうです。

参加者Ｂ　みんなそのことを知らないでいる。見られているといわれて始めて知る。管理者は全部なんでも見られるのですよと。それで、先生は管理者になられた場合、見ますか、それとも見ない…。

江口　見ない自信はないですね。やっぱり、キーワードを引っ掛けたくなると思います。全部見るのは無理だと思いますが、危険なキーワードは引っ掛けたくなるのでないかな。私自身はわりと防衛的にメールを使っています。

早川　私、アマゾンなんかで本を買っているのですが、よく、こういう本が出ました、どうですか、と来る。なんか、見られているようで気持ち悪くて。

江口　便利ですわね…

早川　便利は便利ですが、なんかこう…。あれは人が関与せずにやっているとは思うのですが。どんどん似たような本の紹介が来て見られているようで。

江口　それは、見られていますね。アマゾンとかgoogleは、我々一人ひとりには興味がない。そこまで大きくなると興味を持たなくなって、ただのお客さんだけになっている。だから、学校が一番危ない。学校は中の人がどうなっているか一番興味を持っている。

早川　さっき、子供と大人の話で、学校を例にして、何をしているかどうか、技術的に見られるようになったといわれましたが、子供が成長するには見ないほうがいいということがあると思う。つまり、何でもかんでも、子供が見られているということを知っているということは、よくないと思う。そんなうっとうしいことはないと思う。自分たちがやっていることをいつも大人が後ろで見ていることに子供が気が付いているということは子供の成長にとってよくない、それはやってはいかんことだと思う。子供の成長段階のことを大人がすべて把握していることは、子供にとって不幸な時代だと思う。

江口　その通りだと思うのですが、それがもう可能になりつつあって、やっぱりSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）は、いろいろ危険です。たとえばミクシーなどは、どうしても見たくなるのですね。誰かを通じてそこに入り、そうするとどうして見たくなる、あの子はどうだとか。かなり厳しいものがあって私はミクシーは止めました。見られるのもいやだし、見るのもいやだし。小学校の高学年から中学生にかけては、一番秘密が必要なときなのですね。

参加者Ｂ　だから、ここでやっちゃー見られているかも知れない、ということを、本人が知って、その本人がそれで止める、そういうことが必要。

江口　携帯とかでも学生に訊いてみると、彼氏の履歴は見るとか。とても防衛的になっている。メールは必ず消す癖を付けているとか、彼氏のメールは見るとか。アンケートとったら、四割くらいが配偶者のメールのやり取りを見たことがあると出た。そういう社会は忙しいなんと思います。僕は何とか防衛的にしてきてい

るつもりですが、それでも外に知られたくないデータがいっていない、とはとても言えないんです。自分で検索してみて、どの程度分かるのかなと思ってやってみると、もう抑えきれないところまで来ている。江口に関する大量のデータが出てくる。思いつくひとつの対策は自分から積極的に出していく、そうするとそれらが検索の上のほうに溜まっていくので、それでコントロールできるという、逆説みたいなことですが。

参加者Ｂ　私がちょっと驚いたのは、ある会議に出席するというメールを出したら、それがもう出ていた。なんでそんなことが出てしまうのか。本当に驚きでした。

江口　誰かがそれを投げちゃったんですね。

参加者Ｂ　まあ、それは出席・欠席だけの話ですが。害もないけれど、そういうものすら出てしまう。

江口　そうです、本当に何で来なかったのか、とかになる。それは本人だけでは止められない、他の人があの人が来ていたとか、来なかったとか書いてしまうから。たとえば、お会いできなくて残念だったとか、書きますから。かなり息苦しいです。だけど、その息苦しさを技術的になくするのはかなり難しい。対策もおそらくなくて、これからは社会はそういうもんだと思って、後何十年生きなければならない。情報のコントロールということについては、十年位前に、プライバシーの保護とは情報のコントロールすることだと言われていたが、最近それが難しくなっている。

参加者Ｂ　そういうことを教えるべきですね。

江口　今の子供はかなり息苦しく生きるようになるのでないですか。秘密をもてないということで。自分は注意していても他人がばらしてしまう。うちの親は知らないけれど何々君の親は僕のことを知っているとか。

参加者Ｂ　ある会社で調べたら、７０％くらいは個人メールで仕事は３０％くらいだったというデータがあります。

江口　会社ではウエブサービスなんかも一時期規制していましたよね。最近は気を散らしながらやっても仕事の効率は下がらないと分かったので。実はそういう人のほうが仕事をするみたいで、規制はあまりはやらなくなった。

携帯電話、おしゃべりよりメール

参加者Ｆ　昔は携帯でしゃべっているほうが多かったように思うのですね。ところが最近メールが多く、だんだんしゃべらなくなったようで、それはこの資料にあるように、そのほうが本音が言えるとか、そういった世界にだんだんなってきているような気がします。そうなってきますと、子供に携帯をどうのこうのといったときに、親は通話機能だけの携帯のほうがいいかもしれないが子供のほうはそんな携帯は買いたがらないと思う。

江口　本当に電話を使わなくなっていまして、たとえば大学生の場合、男同士でも女同士でも長電話をしていましたね、ずっと二時間三時間友達としゃべっていた。学生に聞いてみると、今はもうそういうのは少なくなっているみたいです。あれ、何でなんかなと、ずっと思っていて、それは音が悪いからでないかと。大きい電話だと耳元でささやかれているような感じがしていたのに、携帯だとデジタルなので声がきんきんしていて、聞き苦しいし、落ち着いてしゃべる気にならないですね。長電話専用携帯でも作れば売れるんでないかと(笑い)。もうちょっと

聞きやすい音のいい携帯を。メールはどんな早い子でもどうしても書くのに時間がかかるので、あんまりたいした情報をやり取りしていない。

掲示板での信頼性

早川　さっきの話の中に、うそを見抜けない人は使わないほうがいいということがありましたが、うそを見抜くことはどうして可能なんですかね。

江口　どうなんでしょうね。「2ちゃんねる」でするのなら、どこがその情報の正しさを保証してくれるの、どこに書いてあるのと、出典を訊く方法ですね。その発言の元はどこかと。元を出さなければ信じないと、それが基本の態度ですね。

早川　その場合、元に権威がなければいけないですね。

江口　そうです。

早川　新聞や雑誌ではいけないのですか。

江口　新聞や雑誌だったら、オッケーです。その場合、新聞や雑誌として信頼する。それがＸＸ新聞だと信頼しないとか、〇〇新聞だったらどうだとか言われる。私、この「2ちゃんねる」を読み始めてから、新聞社の違いにずいぶん敏感になりましたね。ひとつのニュースに対して、ＸＸだとどう、〇〇だとどう、と並べてくれるのです。そうすると、あれ、同じニュースでも報道の仕方は結構違うもんだなと思いました。新聞にはこう書いてあるがほかの団体ではこう言っているというような紹介もあります。

早川　そうすると、その人個人の意見は信じてもらえないことになりませんか。すべて根拠を求めてうそかうそでないかを判断するのなら、根拠のないものは信じられなくなる。

江口　その場合は、それは単にお前の意見やろうとなる。その場合、名前の付いていない匿名なので、どんなことを書いても、こんな奴もおるのか、ということになる、そうとしか読まれない。

早川　主張する場合は名前を書かなければいけないのですね。

江口　名前を出しても無視されますけれどね。「2ちゃんねる」では名前を付けても、普通、無視されます。騙りだと言われますよ、名前があるとむしろ胡散臭いと。ただ、本当によく知っている人が書くものは、内容が違います。本当にこの人はプロだというのは、どの分野にもいて、その人の書くものは文体で信じられるということはあります。見抜けるようになります、きっと見抜ける。さっきの自殺のことで言えば、メンタルヘルス、心の問題を扱っているところに、すごくよく知っておる人がいるのが分かります。いろんなデータを持っているし、あっちこっちからデータを引っ張って来られる専門家です。掲示板を長いこと見ていれば、この書き方をする人はこの人だと分かる。そして、この人は信頼がおけるというのが大体分かってくる。時間かかるけれど、それは面白いので、そういうのは子供にも読ませていると、だんだん、批判的に読めるようになる力が付くようになるのでないかと思います。そういうことは、学者として研究する上でずいぶん影響を受けています。今まではわりと、教科書に書いてあることを鵜呑みにしていたところがあったのですが、ネットをみていて、あれ本当は違うのかも知れないと思うようになりました。専門のことは論文に書きますが、趣味のことはブログなどがいいですね。趣味だと楽しみに調べられるので。そういうのは積極的に出すようにしています。

予定を立てる

早川　古い人間の言うことだと聞き流してもらえばいいのですが、我々が学生のころは、今のように、電話がどこにでもなかったこともあるのですが、友達の家に遊びに行くのにいちいち連絡したりしなかった。突然訪ねていった。いなければ帰ってくればいいと。今の子は、必ず約束をして、何時何分に行くからいいますかと か、やっている。電話が今ではメールになっていますが。以前我々がやっていたような、直接性というか、そういうものがものすごく欠けているような気がするのです。出かけていけばいいのに。そういうことは全然しないですね。私の先生から言われたのは、人を訪ねたければ約束せずに行きなさい、と。それが今思い出すと、非常に印象深い。間に機械を挟まない、そういう関係がいまや消えかかっている、語り草に近いような状態になっていると思う。なんとなく、もったいないというか、残念というか、そんな感じがしています。

江口　いや、その通りだと思いますよ。僕らも、マージャンメンバーを求めて、一人二人と求めて下宿を回ったりしていました。そのときは、我々は狭い範囲に住んでいたということもあるのかと思いますが。今の子は予定立てるのが好きなということと、予定を立ててもその場でどんどん遅刻するということもありまして、携帯で連絡取ればいいからと。わりと時間にルーズな気がしますね。

早川　予定を立てますね、きちんと。あれ、どうしてなんですかね。

江口　小学校で教えているからでないですか。予定を立てなさいと。

早川　予定など学生の身分のときは必要ないと思うけれど。

江口　学生と、今日飲みに行くぞと言うと嫌がられます。前から言ってくれなければだめだと。いろいろ予定が入っているみたいで。僕自身は何日も先のことを決めておくのはすごく苦手で、その日の気分で動きたいですが。しかし、そういうのはだめみたいですね。

匿名

参加者A　コンピュータネットワーク上の匿名性とプライバシーというのが今日のテーマになっていますが、コンピュータネットワーク上というのを取ったとき、匿名はどんな場合に許されるのか、基本的なことですが。

江口　かなり難しいですけれど、都市生活のいいところは匿名でいられることだと思います。十九世紀ぐらいから言われていますが、ロンドンとか、雑踏の好きな、エドガー・アラン・ポーだとか、ああいう人たちが、都会生活を始めたら埋没して生きる楽さをみんな発見するんですね。それのほうが豊かな感じがするんですね。僕も山形の新庄市というところで、狭いところで生きていて、どこに行っても町内で知り合いに会う。京都に出てくるとだれも知っている奴はいない、匿名の人で歩き回っているとずいぶん自由な感じがします。今の哲学者で、そういうふうな、原子みたいな粒粒みたいになっているのはよくないという人もいるし、各自匿名でリベラルでばらばらに生きていることこそ人間ぽいのだと言う人もいます。僕自身はプライバシーによって隠れているところがあるほうがおもしろいのかなと思っています。特に匿名が必要なのは、意見を交換するときに、匿名でないと書けないものはいっぱいあると思うのです。メンタルヘルスのことも読んでいて俺もこういうことはあるわ、と読んでいて思うことがある。実名では、実は俺もこういうことを感じているとは書けない。それが、みんなネットで感動したことだと思います。どこのだれだか分からないが、中身を共感したり、この感じ

は俺も持っている、返信を書こうとか。ネットの匿名性はこれからも十分保護しないとならない。「2ちゃんねる」の掲示板の反映を見ていると、かなりよかった。全体としてみると、非常に生産的だったなと。今日は紹介できませんでしたが、ネットで音楽をやっていたのですが、通信速度が速くなったので、自分のギターを弾いたのを交換できるようになった。それをダウンロードして、それに自分のギターを重ねるとか出来る。そしてその上で歌う。そういう風にして何人かで重ねていってひとつの曲を作ることがあって、あれはすごく感動しました。楽しかった。見も知らぬどんな人かも分からない人と音楽を一緒に作って、おそらく最後に手を入れてくれた人はプロだったと思います。複数の人たちは全く匿名だったのですよ、だれだか分からない。これは本当に面白かった。

早川　最後の人はおそらくプロでその人の手が入ってとてもよくなったと言われましたが、その人が匿名でなく特定されると、今言われた感動は薄れますか。

江口　そうですね、おそらくプロだと思いますが、だれだか分かっちゃうと面白くないと思います。こんなことが出来るのかと、それがプロだと思って聴くのでなくて、アマチュアだと思って聴く、それの完成度が高かったので本当にびっくりした。名前を出せば、ギャラを出せになるでしょう。哲学関係の論文には名前を出すわけです、哲学系の掲示板には書かないのです。なんでかというと、専門の論文ではお金貰っているのと、掲示板には専門家が書いていないからです。哲学系の掲示板でも、これはまじめに書いているなというのがあった場合、書こうかなと思いますが、そのときは匿名で書く。匿名というのは意外と楽しいのでないですか。見知らぬ人と話すとか、たとえば飲み屋で素性の判らない人としゃべるのなど。特にそのときテーマが決まっていて、音楽のことなどしゃべっているうちにだれだか分かってくる。そういうのって、面白いのでないですか。

参加者B　日本にはないし、私は参加したこともありませんが、仮面舞踏会などは今言われたことでないですか。だれだか分からないけれど気に入る、そしてそのときだけのお付き合いになる。

江口　そうですね。特に悩み多き人とか、あるいは趣味に生きる人とかにとっては、ネットはいいですね、匿名だから。

参加者B　仮面舞踏会だからと、ちゃんと意識して、本気にならない。

江口　使い分けが肝心。匿名で使い分けがうまく行ける人は、ずっとうまく行けるんだと思います。

学校における携帯電話

早川　名田庄では携帯メールでのいじめなどないのですか。

参加者G　名田庄だと中学生は数パーセントしか持っていなくて、持ってなかった子が高校生になると、親との連絡などで必ず持つようになる。そうするとずっと連絡ばかりするようになる。

江口　なんか、女の子にとって、すごい大事みたいですね。母親と連絡を取るのが面白そうですしね。うちの学生も母親と毎日メールしてますと言っている。絆が深まっていいのかなという気もします。

参加者G　うちの子の場合、メールが入るとの着信音が鳴りっぱなしの設定になっていて、出すと必ず帰ってくるので、朝の三時四時ごろまでやっているみたいです。

参加者D　今うちの学校では朝取り上げて、帰るときに返す。そういうなのは喜んでくれる、生徒たちが。メールしなくてもいいと。

江口　解放されるのですね。本当、携帯のメール返すのはしんどいですね。学生も気づいているみたいですが。誰かに強制してほしいみたいなのはありますかね。

江口　ここ二、三年ちょっとよくなったみたいですね。それまでは授業中もやるし、飲み会に行ってもやるし、コンパに行ってもずっと見ているし。そろそろ飽きてきたのかと。世代が違っているのかも知れません。私は携帯は鞄の中に入れっぱなしで、かかってくるのもいやだし、メールも見るのもいやだし、ただ、電話ボックスがないのでもってます。

早川　十時にここを閉めるということなので、途中かも知れませんが、ここで終わりたいと思います。本日はどうもありがとうございました。どうか拍手でお礼にしたいと思います。(拍手)

資料

一．講師

江口　聡　(京都女子大学)

二．日時、場所

平成二十一年七月十一日、名田庄村山村開発センター

三．参加者(五十音順)

司会　早川博信

井尻雅己(名田庄納田終)、門野幸己(名田庄中)、小森哲彦(名田庄虫鹿野)、下道國(可児市)、菅野陽子(名田庄久坂)、坪内彰(坂井市)、坪川博之(福井市)、早川真理子(名田庄三重)、治部ひろみ(名田庄虫鹿野)、藤原義信(名田庄三重)、道下典子(名田庄三重)、森本小夜美(名田庄久阪)

メモ

参加者A　坪内

参加者B　下

参加者C　森本(f)

参加者D　小森(中学校の校長先生)

参加者E　藤原

参加者F　坪川

参加者G　門野